

あなたとわたしの

終末期に寄り添う ホリスティックケア

～ふれあうところ、支えあうかたち～

ホリスティック医学シンポジウム 2014 東京

大切な人の最期をどう看取るか…。 「いのち」を全うするとはどういうことか…。

人生の終末期は誰にでも訪れます。その時をどのように過ごしたいか、あなたは考えたことがありますか。

11月9日のシンポジウムでは、「在宅医療」「緩和ケア」「看取り」の現場にかかわる医師・看護師が、終末期に寄り添うホリスティックケアについて講演を行います。

ご家族のこと、そしていつか看取られる自分自身のテーマとして生老病死を考える機会になると思います。

ご興味のある方は、ぜひご参加ください。お待ちしております。

見どころ 聞きどころ

◆◆◆ 講演 ◆◆◆

プログラムの最初に登場するのは、当協会の**帯津良一**会長（帯津三敬病院名誉院長）です。「本望な逝きかた」を本題に、医療現場、そして毎日の生活の中で「いのちのエネルギー」を高める生き方などのお話をされます。

（当日は、会場で著作本の販売とサイン会も予定しています！）

◆◆◆ 講演 ◆◆◆

午後の部では、日本における「在宅医療」のパイオニアである仙台往診クリニックの**川島孝一郎**医師が、いま注目される「生活機能(生きることの全体)」について、わかりやすく丁寧に解説します。

仙台往診クリニックは患者さんのほとんどが癌末期の在宅看取りの方で、人間として最後まで生き抜くための、ご家族を含めた全人的サポートを目指しています。

川島先生は「白衣を着ない白ひげ先生」として地域の医療・介護・福祉の一体提供の仕組みづくりに奔走されています。外来がない往診専門のクリニックと訪問看護ステーションを組み合わせ合わせた形態で、常勤医師6名（＋非常勤多数）、看護師10名、薬剤師、技師の体制で市内全域に約500人の訪問先と多くの病院、訪問看護・ヘルパーステーションと連携した24時間体制で活動。さらに他の医療機関のスタッフ教育や実習なども無料で受入れ、後進の育成にも尽力されています。HP (<http://www.oushin-sendai.jp>)

◆◆◆ 発表 ◆◆◆

午後の部後半は、現場経験が豊富な3名の医療者が、それぞれの立場から発表します。

「緩和ケア」の現場からは、彦根市立病院の**黒丸尊治**医師が、最期まで患者さんの願いや希望を大切にするホリスティック緩和ケアについてお話しされます。

また、医師として数多くの患者の最期に立ち会い、ご自身の夫の看取りも経験した、**山本百合子**医師は、医療者と家族両方の立場で看取る側の視点を語られます。

看護師の立場からは、ホスピス・ピースハウス病院で**二見典子**さんが行っている実際のケアやコミュニティで得た様々な気づきを語ってくださいます。

そして、プログラムの締めくくりは、パネルディスカッション。ここでしか聞けない白熱した内容が期待されますので、最後までどうぞお聞き逃しなく！

予告編として、出演者の思いや考えが綴られた「シンポジウム抄録誌」の内容をほんの少しだけご紹介いたします。

本望な逝きかた

帯津 良一（帯津三敬病院名誉院長）

「本望な生き方」を果たした人にして初めて「本望な逝きかた」ができる。本望な生き方とは攻めの養生、すなわち日々生命力を高めていき、死ぬ日を最高に、その勢いを駆って死後の世界に突入するといった養生である。

死後の世界の存在については正直なところわからない。しかし、私の場合、死後の世界が無いと困るのである。今生でやりかけたことが、この世だけではとても終わりそうもないからだ。すべてあの世に持ち越さなければならぬのだ。

生と死の統合一つをとってみてもそうなのだ。できればこの世で生と死の統合を果たして、それこそ安らかな心をもってあの世に入って行きたいと思うが、自信があるわけではない。だから、駄目なら駄目で、あの世に行ってから成就するからいいさと高を括っているのである。



ICF生きることの全体と看取り

川島 孝一郎（仙台往診クリニック院長）

日本人の90%以上はやがて半介助・全介助を経て終焉を迎える日がきます。障害者になりながらも豊かな日々を送ることができるために、在宅医療が大事な支援の一つであると私は信じています。

障害者になってゆく日本人が、何を心の糧として、そして具体的な支援の拠り所としてゆけばよいのでしょうか？



答えは『生活機能』です。生活機能は『生きることの全体』です。

身体だけではなく周囲の人々と繋がりながら、地域で暮らしてゆく生活全般を含んだ大きな領域に関与する、私たちが在宅医療の従事者に最も必要な概念です。

どのように死にたいかではありません。死が経験できない以上、最期の瞬間まで経験される生こそがより良いものであるように努めるのが、生きることの全体に含まれるすべての人に共通の理念なのです。

ホリスティック緩和ケアの実際

黒丸 尊治 (彦根市立病院緩和ケア科部長)

私は患者さんの持っている「心の治癒力」を大切にしています。心の治癒力とは安心感や信頼感、期待感、希望といった心の状態が持つ力のことであり、これには症状を改善させたり、苦悩を乗り越えさせたりする力があります。



心の治癒力を最大限に発揮してもらうためには、患者さんの思いに寄り添ったかわりをしていくことが必要不可欠になってきます。逆に患者さんの思いを蔑ろにし、医療者の常識を押しつけるようなかわりをする、患者さんは心の治癒力を十分に発揮することができなくなってしまうのです。

希望という「心の治癒力」は、思いのほかがんの進行を抑えてくれることもあります。その意味でも、まだあきらめたくないと思っている患者さんに代替療法を試みることはとても大切なことだと思います。

医師として、家族として—看取る側の視点

山本 百合子 (医療法人山本記念会理事長)

医師として30年以上、多くの方を外来で診察し、往診や訪問診療にも伺い、そして見送らせていただきました。ご自宅へ伺うと患者様ご自身の家族との関係がとてよよくわかります。その人が過ごしてきた人生が見え隠れしています。ご本人の闘病意欲や家族の協力体制の工夫の中に、その方の人生から発せられる光がみえるのです。



8年前、末期がんの夫を1カ月休職して自宅で看取りました。様々な経緯があって、3年闘病生活の末、自宅治療を望んだ夫は、最期の主治医に私を選びました。

私は夫の期待に応えようと必死に医師であらうとしましたが、今思えば、家族として皆と同じように1日でも1時間でも長く生

きてほしいと願っていただけだったのです。

終末期に寄り添う ホスピス看護師の立場から

二見 典子 (ピースハウス病院副院長・看護部長)

私たち看護師は、患者さんの身体的な反応や行動パターンの意味することを考え、また、相手のペースとニーズに合わせて、安楽な状態をもたらすようにケアします。



患者さんのさまざまな形での応答があり、それをやり取りする信頼感と率直さ、受容という両者の共同作業の結果としてでしか安楽はもたらされないのと思うのです。

また、この共同作業は、両者が喪失や苦しみを認め、防御や免疫性の限界を受け入れていく苦しい作業でもあり、慰めや癒し(自己回復)を見出してくプロセスでもあると思っています。

～以上、シンポジウム抄録誌より抜粋～

★11/9 シンポジウムご参加の方には 冊子を差し上げます！

- ①在宅医療小冊子
『おだやかに最期の日まで暮らすために』
- ②シンポジウム抄録誌
『HOLISTIC News Letter Vol.90』



シンポジウム 2014 実行委員会では、皆さまに「今年も来て良かった！」と言っていただけるような、温かい雰囲気イベントを目指して、準備を進めています。会場にお越しの際は、お気軽にお声がけください。スタッフ一同、皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

HOLISTIC MEDICAL SYMPOSIUM 2014 TOKYO

終末期に寄り添う ホリスティックケア

～ふれあうところ・支えあうかたち～

- 【日時】 2014年11月9日(日) 11:00～17:00
- 【会場】 全電通労働会館 (東京都千代田区神田駿河台 3-6)
- 【前売】 会員 3,000円 / 一般 4,000円 / ペア券(2名) 7,000円
(10/24迄に参加費をお振込み下さい) ※当日券は1,000円増
- 【申込み】 本部事務局 TEL.03-3341-3418(月～金)
WEBからもお申込み頂けます。
http://www.holistic-medicine.or.jp/news/n_symposium/entry1222.php
- 【主催】 NPO 法人日本ホリスティック医学協会